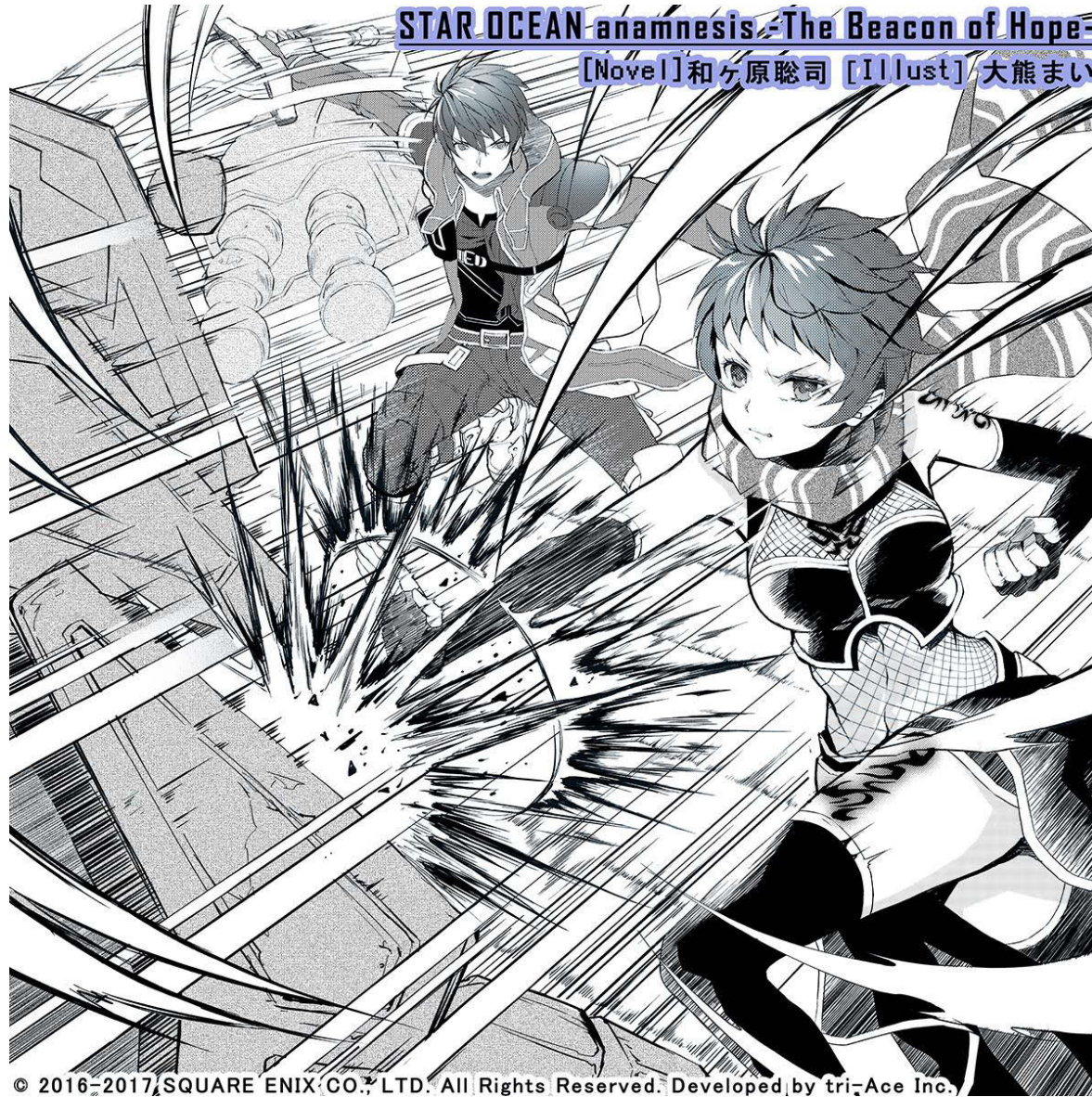


STAR OCEAN anamnesis -The Beacon of Hope-

[Novel] 和ヶ原聡司 [Illust] 大熊まい



© 2016-2017 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved. Developed by tri-Ace Inc.

第二章・蝕まれた惑星・後編

薄暗く、じつとりと湿った洞窟内に、激しい破砕音が響き渡る。

「いただきたいいいっ！！」

気合いと閃光が閃いた次の瞬間、凶悪な二本角を生やした巨大な陸ガメは、轟音とともにどうと倒れ伏した。

「おお」

フィデルが感嘆の声を上げ、私も思わず感心したように唸ってしまふ。

「た、倒したの？」

少し後方の岩陰から怯えた顔を出したリーシュの問いに、たった今陸ガメを地に伏せた女性は大あく頷く。

「思ったよりてこずったけど、なんとか」

軽く汗を拭う動作をしたのは、新たにリーシュに『召喚』された仲間、タイネーブだった。

「これまで倒してきた陸ガメよりもパワーは強かったし、何だか性格も悪そうだったけど、こいつがこの人食いの洞の主だったんでしょうか」

「そうかもしれないわね。この光るトゲみたいなの、何なのかしら。他の陸ガメにはこんなにくっついてなかったわよね。群れのボスの飾りとかかしら？」

リーシュがおっかなびっくり陸ガメの骸に近寄り、明らかに絶命したその顔を覗き込む。

「飾りにしてはちよつと痛そうだな。思いつきりに深く刺さってるし、自然のものじゃない感じがする」

フィデルもリーシュと同じものを見て、首を傾げている。

彼らが陸ガメの死体を観察している間に、コロにこの洞穴周辺の状況をスキャンさせる。

『ご安心を。もう艦長達周辺に危険な生物は存在しないようです。そのまま洞穴を進んでいただくと、かなり歩きやすい道があります。引き続き探索、頑張ってください！』

コロの明るい返事にとりあえず安堵すると、私は洞穴が続く方向を眺めた。

人食いの洞、という割には、なんともあつけない幕切れだった。

本当にただ、凶暴化した原生生物が棲みついただけなのだろうか。

新たな仲間、タイネーブは、生まれ育った国で国軍に所属し、諜報活動に従事しているらしい。

敵地潜入の技術を心得ているのもちろん、なんでも国の要職にある上官の影武者役をすることもあるそうで、変装の技術を体得していた。

タイネーブはその経験をフルに生かし、リーシュに召喚されてから小一時間程度で、見事

にあの漁村の民と見た目が全く変わらぬ姿に変装してみせたのだ。

衣類はレプリケーターで製作するしかなかったが、髪色や肌の色など、近辺の植物や土などを巧みに利用してあつという間に整えてみせた。

言語の問題に関しては、ごく原始的な言語アルゴリズム分析を行い、翻訳機があつという間に解明してみせた。

万端整えたタイネーブが行商人に扮し、漁村から得てきた情報の一つに、今我々がいる『人食いの洞』の情報があった。

元は我々が着陸した陸地の海岸線に無数に開いている海蝕洞【かいしょくどう】の一つであつたらしい。

幅と奥行きがあつたので、海が荒れた際には漁船を退避させるのに使われていたらしいが、十年ほど前に小さな地震が頻発した時期があり、ある時地殻変動でも起こったかのように洞窟のある崖が隆起し、洞窟全体が陸面上上がってしまったのだという。

住民は不気味に思ったものの、洞穴自体の踏破は既に為されていたため、ある村の漁民が資材や食料の貯蔵に使えないかと探検に出たという。

そして、彼らはそのまま戻らなかつた。

洞穴が陸に上がったせいで道が変わったか、地盤が緩み落盤などが起こったか、とにかく貯蔵庫を作ろうとした村の者達を探しに行った者が、そのまま行方不明になるということが連鎖し、行方不明者は20人近くに達する。

いつしか行った人間は二度と戻らぬ『人食いの洞』と呼ばれるようになったという。

「大事件なのに、この国の治安維持部隊はやってこなかつたの？」

その情報を聞いたミュリアの疑問には、変装を解いて元の姿に戻ったタイネーブが答える。

「もちろん周辺の漁村が領主の元に嘆願には行ったそうです。でも……」

タイネーブの暗い表情で、ミュリアはすぐに察する。

「ああ、典型的なダメ封建領主なのね。そもそも国家も安定していない感じかしら」

「そういうことです。行方不明者の捜索と事態の原因究明を嘆願しても、対応はけんもほろろ。特にこの海岸は貴族領としても国土としても端っここの端っこで、もう少し西に行くと大きな山脈が横切ってるらしくて、徴税吏も二年に一度しかやって来ないとか」

徴税すら毎年行われぬとは、なんとも恐るべき僻地である。

「でも、おかげで万が一私達が見つかったとしても、存在が露見することは無いかもね」

確かに、透明艦装を纏っているとはいえ、音や振動までは隠すことはできない。

タイネーブも、あの村の住民の間で山から変な風が吹いてきて異様な音がしたと話題になつていた、と言っていた。

万一我々の存在が露見して、討伐隊でも組まれては厄介だ。

未開惑星保護条約に照らし合わせて、この地域に着陸したのは良い判断だったと言えるだ

ろうか。

私とミュリアはタイネーブの持ち帰った情報で安堵したが、一人、浮かない顔をしていたのはリーシュだった。

「助けてあげられないかしら」

何を、と問うまでもない。

「最初の行方不明者が出てから何年も経ってるんですよ。今更どうにもならないと思う……」

「それでも!!」

ミュリアが言いたいことをきつと全て分かった上で、リーシュはミュリアを遮った。

「元々、何でもない洞窟だったのに沢山の人がいなくなつて、きつと皆不安に思つてる。原因は何だか分からないけど、あたし達なら予め洞穴の外から内部をスキャンして、安全を確保できるでしょう?」

「あなたの優しさは貴重だし、否定したくはないわ。その上で、私達にメリットが無いと言わせてもらう。それどころか原住民に艦の存在が露見して敵対されるリスクがある」

ミュリアの意見は厳しいが、正しい。

「正直、私もそう思います。村自体は決して栄えてはいませんが、村人は明るく血気盛んな印象を受けました。人食いの洞が以前は漁船の避難場所であつたことを考えると、たとえどんな恐ろしい噂が広がつても、よそものが入り込むのを良しとするとは思えません」

「……不安を取り除いてあげたいと思うのは、傲慢かしら」

「そこまでは言わないわ。私だつて目の前で困つてる人を見捨てたいわけじゃない。ただ、危険が人の手でどうにかできるものでない可能性もあるわ。洞穴は地震で海の上に出たんだから、火山性有毒ガスが充滿している可能性もある。今の私達には、そういった危険を冒してまで現地住民を助ける合理的な理由が……」

「あります」

意見を戦わせる3人の女性に割つて入つたのは、機能美溢れるフォルムであつた。

「コロ?」

「僕、リーシュさんの優しさに心を打たれました! ミュリアさん、要は我々が関与する合理的な理由があり、かつ危険が少なければ現地住民を助けても良いということですよね!？」

「……そうだけど」

「タイネーブさんが設置して来て下さつた村の妨害波遮断装置が、件の洞穴を範囲に収めています。センサー解析の結果、問題の洞穴周辺には相当量の鉄が埋蔵されています。今の我々にとつて極めて有用な素材です。純度にもよりますが、素材として採集するのに十分な量と質があると思われます。火山性に限らず、有毒ガスも一切確認されていません。空気が流れているので、空気の出入り口が豊富にある洞穴と推察されます」

その瞬間、リーシュの顔がぱつと輝き、ミュリアは目を見開く。

「更に興味深いのは、洞穴を抜けた先で、際だって強力に妨害波が発信されていることが分かりました。メーアでの活動の安全をより強固に確保するためにも、探索の必要ありと判断いたします」

リーシュは期待に満ちた顔で私とミュリアを交互に見、ミュリアも観念したように肩を竦めて私を見た。

「……艦長の判断に従うわ」

そう言われてしまったら、行かないわけにはいかないではないか。

この瞬間まで、ずっとブリッジの隅のシートに腰掛けて、リーシュ達の様子をただ静かに見守っていたフィデルが、全てを了解したようにすっと立ち上がった。

「それじゃ、行きましようか。リーシュ、艦長」

「うん！！ ありがとう！」

自分の意見が了承されたことよりも、メーアの人を助けられるのが嬉しくて仕方がない。

リーシュの笑顔は、そんな笑顔だった。

一方のミュリアはすつと話の輪から離れ、早速該当区域の地形図を私のクオッドスキャナーへと転送してきた。

「……ミュリア」

リーシュはミュリアを怒らせてしまったのかと心配する顔になったが、私は首を振り、小声で言う。

今回はコロの分析と発言のタイミングが悪かったが、

「どういう意味ですか！」

ミュリアの意見とスタンスは、艦と乗員の安全を最大限確保するために有用な視点だ。

「無視しないでくださいよ艦長！」

リーシュもミュリアも行動の指針となる意見を多く出ただけであり、むしろこの遭難状態にあつては、不和を恐れて発言しないよりも、一つでも多くメリットとデメリットの分析要素は提示され続ける方がいい。

「そういうことよ」

話を聞いていたのか。

「耳は良い方なの」

長い耳介とかけた冗談なのかどうか判断が付きかねるが、振り返るミュリアの顔は微笑んでいた。

「私は一人で過ごしてた時間が長かったからね。どうしても、行動が臆病になるのよ。だからこそ生き残ってこられたんだと思ってるけどね」

ミュリアは長い髪をさつと払って、またコンソールへと向かった。

「リーシュ。私は見ず知らずの他人のために命を張ろうってバカなこと考える人が、最近嫌

いじやなくなってるの。いざというときは私がきちんとブレーキになってあげるから、あなたはあなたの思うままに進みなさい。そうすればきっと、この艦はそこそこうまく進むわ」

センサー解析によって、洞穴自体はさほど広大ではないことからミュリアは今回も艦に待機し、現地の人から洞穴の話を直接聞いたタイネーブと、フィデルとリーシュ、そして私の4人で洞穴探索に赴いた、

そしてつい先ほど光るトゲを持つ巨大大陸ガメを倒したわけだが、タイネーブ曰く、この陸ガメが生息していることは、洞穴が海に浸かっていた頃から知られた話であつたらしい。

ここまで『人食い』を思わせるような行方不明者の痕跡は何も見つかっていない。それに、やはりたつた今タイネーブが倒したこの光るトゲを持つカメラが気になる。どうにもトゲの形状が人工的な印象を抱かせるのだ。

ここからこの巨大なカメラの死体を持ち帰るのも難儀なので、クオッドスキヤナーの簡易スキャンでデータをコロに送信すると、コロも怪訝な返事をよこした。

『クオッドスキヤナーの簡易解析のデータ上は、他の個体と大きな差異は認められません。確かに光学的にはトゲが刺さっているようにも見えますが、肉体には損傷は無いようです。タイネーブさんとの戦闘データと合わせて、とりあえず記録をしておきますね』
確かに今はそれくらいしかできることはない。

「じゃあ、このカメラが極端に凶暴化して人を襲っていたということではないのね」
リーシュの顔色がかなり悪い。

艦からここまでかなりの距離を歩いた末の戦闘だし、やはり体調が完全には戻っていないなかつたのだろうか。

「ううん、大丈夫。ただ、ちょっとあたしを追っていた連中とダブっちゃって……」
青ざめた顔で呟くリーシュ。

確かに、異様な巨大生物という意味ではあの蟹を想起してもおかしくはない。

だが私がそう思った瞬間、リーシュは何故かはっとして顔を上げ、慌てたように首を横に振った。

「ごめん、なんでもないの。本当に大丈夫。ちょっと気になっただけだから」
どうしたのだろうか。一瞬子供が何かを誤魔化すような顔にも見えたが、特に今リーシュが誤魔化すようなことは……。

『大丈夫ですか？ ムリはしないでくださいね！ 艦長、何ならスキヤナーでリーシュさんを診察して下さい！ 異常を見落としてはいけませんから隅から隅まであわわわわっ?!』
妙に庄のある提案が、途中で慌てふためいた声になり、一瞬の雑音の後に沈黙する。

「コロ？ どうした？」

フィデルが驚いて尋ねると、答えたのはミュリアの声だった。

『気にしないで進んで。リーシュ、無理はしないようにね』

恐らくセクハラじみたことを言い出したコロを、ミュリアが雷撃で黙らせたのだろう。

「うん、分かった……セクハラポイント、プラス3」

リーシュはリーシュで、少し怖い顔をして妙なことを言っている。

あまり溜めたくない感じのポイントなので、コロの犠牲を他山の石として、私は紳士たるよう心がけよう。

まずは、話題を変えることだ。私はタイネーブの独特な戦闘法について、ねぎらってみる。巨大生物に負けないパワーと、拳法と紋章術をミックスしたような戦術は驚嘆に値した。

「ありがとうございます。でも、私なんかまだまだです」

タイネーブは謙遜ではなく、そう言った。

「私は本当について最近ウチュウという広い世界を知ったんです。私の世界だけでも私より強い人は沢山います。まだまだ、精進あるのみです」

本人の弁を信じれば、彼女の故郷も彼女自身も、宇宙の存在を知って間が無いらしい。

フィデルとミュリアが二人とも宇宙についてかなりの知識や経験を持っているのと比べて、タイネーブは自分の星の名すら知らなかった。

その割には、自分が全く異なる惑星に呼ばれたこと自体は彼女の中では特に疑問ではないらしい。これは一体どういうことなのだろう。

ただ、今はその疑問を急いで解決するタイミングではない。

本人が納得しており、私達が彼らを元の場所に帰す方法を持たない以上、過剰に確認しても意味は無いのだ。

だから私はタイネーブに、謙遜する必要はなく頼りにしたい旨を告げると、

「あ、ありがとうございます……」

タイネーブは少しだけ頬を上気させる。

『リーシュさん、今のプラス1ポイントじゃありませんか？』

「分かったわコロ。記録しとく」

だが、その裏でどういう訳かポイントが加算されていた。

理不尽だ。

だが、ここで抗議しても始まらない。

『その先は、例の妨害波が強力に検知されたエリアよ。全員、警戒は怠らないように』
ミュリアの警告に、全員が改めて気を引き締めた。

「これは……」

フィデルが見上げる空は、異様なものに遮られていた。

「村では、誰もこんなもののは話は……」

タイネーブも驚愕の表情で、フィデルと同じものを見上げている。

『妨害波の発信源は、間違いなくソレです！ 気を付けてください！ 妨害波が発信され続けているということは、設備が生きている、ということですから！』

私の襟のデバイスから、コロとミュリアも同じものを艦のモニターで見ているのだ。

「一体、誰がこんなものを」

リーシュの呟きを聞き、私はフェイズガンのセーフティを解除した。

そうだ、こんなものが自然の造形であるはずがなく、この惑星メーアの人類が建造できるはずがない。

人食いの洞を抜けた我々の前に現れたのは、屹立する巨大な高層建築物群であった。地上50メートルほどの、金属質の外壁を持つビル、或いはタワーと呼べるものだ。

「ここを壊せば、妨害波は止まるのね？」

『待つて下さいリーシュさん！ 壊しちゃ駄目です！！』

突然物騒なことを言い出すリーシュを、コロが慌てて止める。

『設備が生きているということは、このタワーには何らかのエネルギー源があるということになります。艦のパーツの修理や増強に使えそうな部品があれば回収するべきです。艦長』つまり、どこか入り口なり整備口なりを探して、このタワーの内部を探索しろ、ということだ。

「妨害波遮断装置を置いてみたけど、どう？ 誰かいそう？」

『申し訳ありません。その試験機では発信源の強さに対抗できないようです。全く内部の状況は把握できません』

そして、どんな危険な機構が待ち構えているかも分からないということだ。

「でも妙だな。これだけ大きくて複雑そうな建物なのに、警備や管理の人間の姿が見えない。

この施設、もしかして放棄されているんじゃないやませんか？」

「多分なんですけど、この建物にはかなり長い間、人が来ていないんじゃないかと思えます」とするとフィデルとタイネーブがそんなことを言いだした。

何故そう言えるのかと問うと、フィデルは周囲を見回しながら言う。

「どう見ても重要な施設ですよ。警備兵の一人もいないのは、明らかにおかしい。この場所も、かなり広い。警備が監視カメラや呪印……あ、紋章術に頼っていたとしても、身を隠す場所もないのに姿をさらしている僕らを、放っておくのでしょうか。ここは、あの人食いの洞に繋がる場所なんですよ」

これには私もリーシュもはっとする。

このタワー群は、明らかにこの惑星の文明レベルにそぐわぬ建造物だ。

ならば一体誰がこんなものを造ったのか。

決まっている、この星の文明レベルを超えた存在、即ち先進惑星の人間だ。

そしてこんな僻地の、更に人里から離れた場所に隠れるように造られ、近づこうとしたメーアの人間は次々に行方不明になっている。

人食いの洞の正体がおぼろげながら見えて来た。

だが、肝心の『先進惑星の人間』はどこにいるのか。

私がそう言うと、タイネーブが難しい顔で、我々が通ってきた洞窟を振り返った。

「周りの地面は背の高い草だらけ。ここに来るための洞窟の地面には、風の通った砂埃の跡以外にはあの陸ガメの足跡しか見つかりませんでした。最低でも3年近く、人がやってきていないはずです」

つまりこのタワーを作った人間は、何らかの理由で機能を稼働させたまま設備を放棄した。

もちろん直接的に惑星地表には降りず、宇宙から転送などで人員を送っている可能性もあるが、それならば尚のこと、今身を晒している我々に対して何のリアクションも無いのがおかしいということになる。

妨害波の発信が主目的なのか副次的なものかは不明だが、現状このタワーを探索するに当たり警戒すべきは、

「ガードロボットの類がいるかどうか、ね」

リーシュが私の思考を先回りして言い、私も頷く。

人間の姿が見えないからといって、警戒は怠れない。

私はリーシュにクオッドスキャナーを手渡すと、絶え間なく周囲をスキャンし続けるように指示する。

私とフィデルとタイネーブが常に周囲を警戒しながら進む。

その間に、リーシュにはタワーの分析を可能な限り細かく頼むことにする。

「分かったわ。任せて」

リーシュは力強く頷き、フィデルもタイネーブも、それぞれに警戒態勢へと移行する。

私はコロとミュリアに、タワーへの威力偵察を開始する旨を告げ、この惑星メーアの文明レベルに全く見合わない、謎のタワー群へと潜入を開始した。

「やはり、この建物は放棄されてるみたいね」

リーシュの硬い言葉に、たった今ガードロボットを一刀の下に斬り伏せたフィデルが頷く。

「何と言うか、こいつら武器もボロボロで、あちこち錆びてましたよ」

「人間じゃないと分かっているけど、一方的に叩きのめすのは気が引けますね」

タイネーブも、拳を払いながら砕けた人型ガードロボットを見下ろす。

警備システム自体は生きていたが、肝心のガードロボットは長い間整備を放置されているのか、ろくに稼働していなかった。

まるで古いホラー映画の生きた死体の如き動きではフィデルとタイネーブの身のこなしには対抗できず、遠方から狙ってくる実弾兵器も暴発だらけでほとんどこちらに飛んでこず、全て私のフェイズガンで沈黙した。

最終的に出現した、ガードロボットの統率機体らしい大型機もほぼ同様だった。

リーシュを下がらせ、私が足元の移動機構をフェイズガンで撃ち抜き、アームや銃をフィデルが全て斬り飛ばし、最後にはタイネーブが陸ガメを倒したときと同じように紋章術と体術をミックスした殴打を叩きこんだだけで沈黙してしまった。

「一応、生身の人間がいた形跡はあるわ。今あたし達がいる施設は、研究施設みたい。実験道具みたいなものや、用途が分からない機械、あとは薬品みたいなものが沢山残ってる。研究の目的が工学なのか、医学なのか、理学なのかは文字が読めないから分からないけど」

リーシュの報告に、私は小さく頷いた。

クオッドスキヤナーで文字の解析ができないということは、やはり銀河連邦とは関係の無い先進惑星文明のようだ。

そういった文明に接触したときの言語解析のヒントとなるのは構文が分析できる文章なのだが、人工的な素材や薬品などの固有名詞は命名の背景の文化の理解がなければ解析が極めて困難であることが多い。

「あとはやっぱりこの星じゃありえない、光学兵器が保管されてる倉庫があるわね。スキヤナーに記録されてる銀河連邦に登録されている資料とは一致しない製品だったけど」

動くのか、との問いには、

「整備不良期間が長すぎて、暴発したら大変」

という良いのか悪いのか、とりあえず使えないという返事。

『『人食い』に関してはどうでしたか?』

タイネーブの問いにも、リーシュは渋い顔。

「少なくともここまで行方不明者の痕跡は見当たらない。ただ……問題の光学兵器は出力がかなり高いらしくて、もしかしたら……」

この建物に繋がる洞穴は、多くの人が痕跡も残さず行方不明になってしまった場所だ。

「消されてしまった、と? これ、もしかしくても先端から光が出る筒ですよ」

タイネーブはスキヤナーの映像を見て、少し顔を青ざめさせる。

彼女は先進惑星文明には疎いはずだが、リーシュのスキヤナーが展開する映像を見て、フェイズガンカレライザーライフルか、それに類する光学兵器についての知見を述べた。

そのことについて問うと、

「……つい最近、故郷で似たようなことがあったので」

タイネーブは言葉少なにそれだけ答えた。

先進文明の巨大な廃墟の中で、私はこの設備を作った存在に想いを馳せ、身震いする。

その者達は、一体なぜこんなところにこんなものを。

そしてまた何故、これを放棄したのか。

銀河連邦の勢力圏から遙か遠く離れたこの宇宙で、何か途方もない悪意の片鱗に触れたような、そんな気分だった。

※

「やりました！ やっちゃいました！ やりやがりましたね艦長！！」

「言語機能がおかしくなっていない？」

リーシュの突っ込みを無視して、コロは興奮気味にブリッジ内を駆けまわっていた。

「妨害波は完全に停止！ センサーが回復しました！ 更にはリーシュさんの見つけたエネルギーユニットが我が艦に流用できるものでした！ シールド効率が36%に回復しました！ もうデブリなんか怖くありません！ これで宇宙は僕らのものです！ 艦長の頑張りのおかげですね！」

私の頑張りなど大したことではない。

フィデルとタイネーブの力と、リーシュの冷静な行動、ミュリアとコロの後方支援あつてのこの成果だ。

「艦長のバイタルが、今の言葉が本心であると告げています！ 僕は今猛烈に感動しています！ センサーが回復したおかげで惑星スキャンもぎゅんぎゅん進んで僕の感情表現もぎゅんぎゅん刺激されているところにそんな殺し文句を言われたら僕のCPUはオーバーヒートしてしまうかも……！！」

色々と気持ち悪いから少し黙って仕事をしてほしい。

「ああっ、そんな冷たい言葉も今はぎゅんぎゅんあわわわっ！」

最早定番となったミュリアの雷撃を尻に受け、興奮していたコロは黒い煙を上げながらひとしきりまた艦橋をころころと転がった。

「それで……結局あの塔は、何だったんですか？」

転がってくるコロをよけながらタイネーブが尋ねると、ミュリアは壁にぶつかって停止したコロを見ながら眉根を寄せた。

「研究施設部分からダウンロードできたデータは連邦の書式や言語とは全く違うコードが書かれてるみたいで、コロが現在も分析を継続中。詳細が分かるまでには、一日二日どころではないくらいかかるそうよ」

私は驚く。

コロの行動や感情表現は色々と鼻につくが、AIとしての性能やOSのスペックは連邦最前線の艦に搭載されるだけあって高水準である。

そのコロが、いくら巨大な施設から吸い上げたデータとはいえ、解析に何日もかかるとは。驚きが表情に出ていたのか、ミュリアが補足する。

「自身はドキュメントだったり音声だったり動画だったり色々みただけど、いくつかのファイルにはかなり嚴重なプロテクトがかかけられてるみたいなの。言語だけじゃなく、プログラムも解析しなきゃいけないみたい」

なるほど、ただでさえ言語が不明なのに、その不明言語を元に組み立てられたコンピュータープログラムまで解析しなければならぬのでは、時間がかかるのもやむを得ない。

「そっちの解析が済まない内は迂闊なことは言えないけど、ただ、あの巨大施設から発せられていた妨害波が何を隠したいのかだけは判明したわ。コロ、例のデータ出して頂戴」

「は、はい……」

コロが震える声でちかちかと目を光らせると、メインスクリーンに惑星メーアの全体像が表示される。

そして、惑星地表面とマンツルの間に、極めて不自然な表示があることに全員が気付いた。

コロが震える声で、状況を解説する。

「せ、センサー回復後にはすぐ調査をした結果、この陸地の地下に、この星の文明レベルでは到底実現不可能な規模の地下採掘が確認されました」

艦橋にいる面々が、大きくざわついた。

「あのタワーから発せられたセンサー妨害波は、宇宙からこの有様を隠すために発信されているのではないかと思われます」

「つまり誰かが、他人の星から意図的に、しかも大量に資源を盗んでいるってこと！？ そんなことが許されるの!？」

惑星の資源を拝借しているという点では、今の私達もあまり大きなことは言えない。

だが、スクリーンに表示された地下空間の規模は、緊急避難などの言い訳は一切通用しない、いっそすがすがしいまでの盗掘だ。

人食いの洞のことを考えても、宇宙からはもちろん現地住民の目からも逃れるようにあんな設備を作っていることを考えれば、後ろめたいことをしている自覚もありそうだ。

連邦の勢力圏外のことではあるが、記録は残しておかねばならない。

同じ宇宙にある存在なら、いつかは連邦と接触するかもしれないのだから。

「でも、今はこの星に、あの塔や研究施設を作った奴らはいないんだよな……だとしたら」

「この星で必要な資源を採り尽くして、別の場所に移動している。十分考えられることよ」

「じゃあ、他にも盗掘されている、ワクセイですか？ そういう所があるってことですか」

フィデル達の予想は、当たっているように思う。

放棄された施設は、時間こそ経っていたが整備の手さえ入れればまだまだ長い間使える程度のものであった。

にも関わらず操業の手はなく、廃棄され、しかもこの採掘規模を考えれば、盗掘者達のこの星での目的は完遂されたのだろう。

「あたしは……あたしはこんな酷いことを……見逃すことは、できない」

リーシュは、虫に食われた果実のように無残に採掘跡を穿たれた惑星メーアの姿を見ながら、拳を握り怒りに震えていた。

「この惑星メーアの正しい進化を阻害する権利なんて、誰にも無いのに!!」

瞳には涙すら浮かべ、この大規模で無責任な採掘の結果、惑星メーアの人々が得られるはずだった未来の利益と選択肢が失われたことを、我が事のように悲しんでいた。

「艦長達の、地球への帰還を、邪魔をしたくないとは思ってる……でも」

絞り出すように言うリーシュの言葉を、私は遮った。

皆まで言わずとも分かっている。

もし、また似たような状況の惑星を発見したり、或いは魔手が伸びかけている惑星を発見したら、私にはもうそれを見過ごすことはできない。

現実的な問題としても、連邦軍人としても、一人の人間としても。

「本当!?!」

もちろんだ。

未開惑星保護条約は、ともすれば未開惑星がどんな危機に陥つていようと一切の手を差し伸べず見殺しにしろと言っているかのように解釈する向きは多い。

だが一方で、もしその危機が他惑星の先進文明による意図的な侵略行為から発する危機である場合には、積極的に介入して危機を排除するよう推奨されている。

これは今から200年ほど前に、地球連邦が銀河連邦に組織改正される大きなきっかけとなった、レゾニア戦役の最中に起こった出来事を前例として追加された条項である。

そしてその条項に従えば、今の私達に、これから先、大地を無法に穿たれようとする惑星を救わないという選択肢は無いのだ。

「困っている人がいるなら、助けなきゃな」

「仕方ないわね。この宙域にこれだけの施設を作れる勢力だったら、コンタクトの可能性はゼロじゃないわけだし」

「私達は情報で遅れています。積極的に情報を集めて行けば、いざ戦いになったときに戦況を有利に運べます。諜報の基本です!」

「みんな……」

それぞれにリーシュの意志に賛同するフィデル達。

リーシュは感極まって、瞳に浮かぶ涙を拭った。

「言葉にしてもらえると、こんなに嬉しいものなのね……」

「僕のことも忘れないで下さいっ!!」

「きゃああっ!?!」

そこに乱入するのは当然、ミュリアの雷撃から復活したコロである。

一体どういう原理なのか、リーシュの顔に張り付かんばかりに空中に体を浮遊させて、そのくどい顔をリーシュの視界いっぱいに展開していた。

「リーシュさんと皆さんの心意気のためにも! 艦長を無事地球に送り届けるためにも! この宇宙で今も辛酸をなめている多くの人々のためにも! 安全航行出前迅速全力解析で、皆さんの道行きをサポートいたします!」

「あ、あ、ありがとう。コロの熱意も受け取ったからちよつと離れて……」

「まずはリーシュさんが採取したこの解読不能のデータを一日も早くギッターンギッターンのグッチャングッチャンに解析して、宇宙を荒らす盗掘組織の尻尾を掴んでやりますよっ!! 期待しててくださいね艦長っ!!!!」

油断していた。

リーシュからこちらに予備動作無しに飛んでくるのに対応できず、視界一杯に広がる緑色に怪しく光るコロの瞳に圧倒されて、体が仰け反ってしまふ。

「頑張ってくれるのはいいけど、データ壊したりしないよね……」

コロの暴力的擬音表現にリーシュの不安げな声が重なり、フィデル達は思わず笑ってしまっている。

先行きは不安なことばかりだが、少なくとも私達の間には、こうして笑顔が生まれる。

目的も、意思も統一されている。

惑星メーアでの出来事は決して良いことばかりではなかったが、私達の宇宙の旅の先行きに、微かに、だが確かな光をもたらすものだった。